View metadata, citation and similar papers at core.ac.uk
brought to you by CORE

詩人の経済指数
― ディキンスンとランプ、出版、身体 ―

吉田 要 [a]

[a] 湘北短期大学

【抄録】

本稿はエミリィ・ディキンスンのオイル・ランプと出版に関する詩・書簡を社会的・経済的・歴史的に考察することを目的とする。最初に考察する“The Lamp burns sure – within – ”は、詩人が執筆できるよう召使たちがランプに油を充填するのに対し、詩人を指し示すランプは物書きに専心しており、詩人が創作活動に勤しむことができるのは召使たちの下働きのおかげであると解釈できる。次に論じる“Publication – is the Auction”は、文学市場に作品を産出することが商品として詩人自身の身体を売りに出すという解釈が可能であるため、貧困に陥らない限り、出版を見合わせたいという詩人像が浮かぶ。これらの詩をディキンスンの書簡や社会的・歴史的資料を加えて読むことで、彼女の詩作品が経済的な境遇を背景にもつ産物であると結論付けた。

【キーワード】

エミリィ・ディキンスン　　ランプ　　出版　　身体

はじめに

19世紀のアメリカで女性詩人が詩を書くという行為の背後には何が隠されていたか。本稿はこの問いに二つの視点から接近し、19世紀アメリカを代表する女性詩人、エミリィ・ディキンスン（1830-86）の詩作にまつわる背景を探ることを目的とする。

まずは闇の一隅を照らすランプに焦点を当て、ランプに付随する経済的･歴史的な要素を辿って、他者による労働がいかに詩作の基盤となっていたかを考察してみたい。

＜連絡先＞

吉田 要　ysd_kaname@yahoo.co.jp

次いで市場経済へと視野を広げ、出版をめぐる社会状況を概観しつつ、ディキンスンの出版に対する態度とディキンスン家の家計状況を照らし合わせて、出版を通した「身売り」行為には与しなかった経緯に1つの筋道を立ててみたい。

ランプと出版という二つの視点を通して見えてくるのは、ディキンスンが当時の社会、経済、歴史の中に組み込まれていた姿である。

1. 詩人とランプ

ディキンスンの詩を読む上で、詩中の「私」とディキンスン本人が限りなく重なり合う読まれ方をする作品は数多く存在するが、まずはそのうちの一つを見ることで、おそらくは無意識的に、ア

プリオリなものとして描いているであろうディキンスンの階級意識を可視化してみたい。

I was the slightest in the House –
I took the smallest Room –
At night, my little Lamp, and Book –
And one Geranium –
・・・・・・・・・・・・・・・・・(Fr473) [1]

この詩の語り手は自分が家中で最も些細な存在であり、家の中で最も小さな部屋をその居城としていると声高に宣言しているが、“the smallest”という最上級の表現からは、この家には最低でも三つの部屋――おそらくはそれ以上の部屋――があることが示唆されており、それゆえ、大邸宅の中であるからこそ“slight”という形容詞がより一層その意味を主張することにつながっているように思われる。そして、夜になればランプを灯して書物を広げる生活が保障され、“parlor culture”を演じる“Geranium”(Farr 307)が部屋の一隅を慰めてくれるということから、経済的基盤の整った上流階級が所有する家屋での生活が目の前に立ち現れてくる。たとえ“slightest”や“smallest”と言ったところで、そこには労働者階級の生活にはないものが並べられているということを見逃すことはできない。

更に注目したいのは“Lamp”である。この詩が書かれた1862年は照明装置としては依然、ランプやろうそくが用いられていた。Thomas Schlerethによると、ランプの燃料としてはラード、鯨油、綿の実、ひまし油、テレビンなどが一般に用いられ、1859年以降、一般家庭では灯油ランプが流布し、その後、ガスが一時代を築いたのに続いて、1879年にエジソンが白熱電球を実用化させたということだ(231-4)。

ランプは手入れが面倒で、油の注入、煤払い、灯心の切り込みなどが日々必要だったらしく、死後出版となった『ディキンスン詩集』の編者の1人、Mabel Loomis Toddの娘であるMillicent Todd Binghamは、当時はまだ「ガスや電気がなかったために、ランプを毎日掃除して鯨油を注ぎ入れなければならなかった・・・・・・。獣脂のろうそくがしばしば自宅で作られ、ベッドへ向かう家族を照らした」と回想している(113)。その上、ランプは高価で燃料効率も悪かったため、社会的な不平等が如実に現れるものでもあったということだ(Mitchell, *Monarch* 331)。その点、ディキンスン家には読書という余暇のために使用できるランプが存在し、そのランプを手入れすることを担ったであろう召使がいた。このことも上流階級を示す十分な記号になるだろう。そこで、そんな日常の一幕を垣間見せてくれる、油をランプに補充する者が描かれている詩を見てみたい。

The Lamp burns sure – within –
Tho' Serfs – supply the Oil –
It matters not the busy Wick –
At her phosphoric toil!

The Slave – forgets – to fill –
The Lamp – burns golden – on –
Unconscious that the oil is out –
As that the Slave – is gone.　　(Fr247)

RC Allenはこの詩のランプを物理的なランプではなく精神、「プシケ」の象徴だとし、無意識的な創作意欲にたぎる灯心として詩人が表現されていると解釈している(27)。もちろんこの解釈は“The Poets light but Lamps – / Themselves – go – out – / The Wicks they stimulate”(Fr930)と並べて読むまでもなく、詩的想像力の源泉としてのランプという発想に大きく依拠しているだろう。

しかしこの詩で見逃してはならないのは、ディキンスン自身、この詩と書簡で一度ずつしか用いていない「農奴」(“serf”)という単語が登場し、「奴隷」(“slave”)と意味作用を補完しあっていることだ。

この詩が書かれた1861年(Franklinはこの詩の執筆時期を1861年後半としている)は、“serf”をめぐってロシアで大きな動きがあった年である。それは農奴解放令(3月3日)にほかならない。クリミア戦争の敗北後、中世的な封建制度の色濃い農奴を解放し、近代国家への脱却を図ろうとした皇帝アレクサンドル2世の改革は、しかし、結局のところ農民に十分な土地が開放されずに不徹底なものとなってしまったというのが後に判明する史実であるが、農奴解放が公布されてまだ間もない、期待と不安が入り混じるロシアの当時の状況が、ディキンスン家の購読雑誌*Atlantic Monthly*(1861年7月発行号)に“Emancipation in Russia”と題して掲載されていたことは、十分に考慮する価値があるだろう。この記事は16世紀以降のロシアの歴史を概観しつつ、農奴解放がいかに偉業であるか、またその偉業の履行がいかに難題であるか、そして何よりもその行く末に注視する必要があるということを、度々アメリカ合衆国の奴隷制度を持ち出しながらまとめている。その中で、アメリカで同時期に巻き起こっていた奴隷制度を巡る争いに触れる際、ロシアの“serf”/“serfdom”とアメリカの“slave”/“slavery”が併置されており、時に同義語として用いられていることは注目に値する。[2] この点は詩の中の“Serf”と“Slave”が同義で用いられていることともつながってくるだろう。そして“Serf”と“Slave”が同義語であることは、ディキンスン家の“Serfs”の表象にも少なからず影響を与えているようだ。

ディキンスン家の召使たちに触れるには、書簡の中で用いられている“serf”から確認するのが適しているだろう。下に挙げるのは、ディキンスンが身内以外で最も多くの書簡をやり取りした記録が残るホランド夫妻へ出した手紙からの引用である。

> Good-night! I can't stay any longer in a world of death. Austin [Dickinson's brother] is ill of fever. I buried my garden last week – our man, Dick, lost a little girl through the scarlet fever. I thought perhaps that you were dead, and not knowing the sexton's address, interrogate the daisies. Ah! dainty – dainty Death! Ah! democratic Death! Grasping the proudest zinnia from my purple garden, – then deep to his bosom calling the serf's child! (L195、下線筆者)[3]

Dickとはイギリスから移民してきて、ディキンスン家の納屋を兼ねた小屋で自分の家族と暮らしていたRichard Matthewsという馬丁で(『書簡集」補遺 959-60)、彼が8歳の娘Harrietを猩紅熱で失ったことにディキンスンが触れたものが上の文面である。この箇所で気になるのは、Harrietという名前を出していないことは驚くに値しないが、その子を“serf's child”と表現していることだ。この表現には、白人労働者階級とその雇い主側という階級意識が如実に表れているだろう。Matthews一家はディキンスン家の使用人の中で数少ないイギリス移民であったが、その一方で、ディキンスン家では数多くのアイルランド系移民が働いていた。[4] アイルランド系は1845年のアイルランド飢饉以降、大挙してアメリカに押し寄せており、デイヴィッド・ローディガーによれば、当時は黒人と同等、或いは時に黒人以下の「人種」と見なされたこともあったという(216-61)。

ディキンスンはアイルランド系移民一般に対

しては好ましい感情を持っていない。ボストンのアイルランド移民児童が大半を占めていた学校で一年間教職に就いた兄のAustin宛ての手紙に“Vinnie [Dickinson's sister] and I say masses for poor Irish boys souls. So far as *I* am concerned I should like to have you kill some – there are so many now, there is no room for Americans. . . .”（L43）という辛辣な言葉を書いている。Betsy Erkkilaによると、ディキンスンはアイルランド系移民に限らず、アンドリュー・ジャクソンに代表される民主主義をはじめ、大衆、外国人、黒人、社会改正、西部開拓など、社会を均質化して上流階級を脅かす民主主義社会や資本主義社会の到来に危機感を持っていたということだ（140）。それに対し、ディキンスンはディキンスン邸で働く召使たちに対しては身内意識があったようで、アイルランド系移民で常駐の女中だったMargaret Maherと一緒にパンを焼いたり（“I was making a loaf of cake with Maggie”：L907）、死後にはピューリタン社会のタブーを侵してまでアイルランド移民の6人の男たちに棺を担がせたり（Murray, “Miss Margaret's” 729）、Maher自身がディキンスン邸で働いていた当時に書いた手紙に“All that is in the house is very fond of me and does every thing for my comfort”（Qtd. in Murray, “Miss Margaret's” 713）という記述が残っていたりする。

Margaret Maherはディキンスン家に1869年から仕えていたが、Maherの前任はMargaret O'Brienで、1855年頃から働き出したということだ（『書簡集』補遺　959）。少し遠回りしたがここで“The Lamp burns sure – within –”に立ち返ると、伝記的事実に照らし合わせれば、1861年に書かれたこの詩の中ではMargaret O'Brienがランプに油を注ぐ“serf”、或いは“slave”に該当するだろう。O'Brienに相当する立場の者が詩の中で“Serfs”と複数になっているのは、ランプが灯っている間にのべ何人か、或いは同一人物が複数回にわたって、油を補充する必要があったからだろうか。ここにはランプが燃えている時間が長い可能性も垣間見られる。油を充填する“serf”たちの労働のかたわら、精神の働きを象徴するランプが炎をしっかり保ち、“serf”たちに構うことなく精神の炎をたぎらせて思索・詩作に励むというのが第一連だ。[(5)] ここには油という経済的要素を指し示す下部構造と、思索・詩作という上部構造を読み取ることも可能だろう。第二連では、たとえ油が補充されることなく尽きてしまっても、ランプという精神がそんなことには気づかずに赤々と燃え続けることが描かれている。一見すると、「奴隷が去ってしまったので油が尽きたということに気づかない」ほど一心不乱に、精神活動に勤しんでいるように思われる。しかし注意したいのは、ランプには油や奴隷が“unconscious”であってもランプが物理的に機能するには油が必要であり、そもそもランプに油を注ぐ者がいてはじめて詩人はランプを灯して精神活動に励むことができるという前提に対して、読者が「意識化」させられるということだ。表舞台では「忘れ」去られ、裏舞台へと「去って」しまった「奴隷」がいること、延いては「奴隷」を所有する経済的基盤があることが、この詩を根底で支えているのは間違いないだろう。

Murrayは、Margaret O'Brienが結婚でディキンスン家を去ってMargaret Maherがディキンスン家にやって来るまでの1865年～1869年に、ディキンスンの私製詩集“fascicle”制作が止み、手紙を書く割合も減っているという鋭い指摘をしているが（“Miss Margaret's” 724-5）、このことは、アイランド系移民を中心とした召使たちの尽力があったからこそ、ディキンスンの詩作・思索が成り立っていたことを十分に示す根拠となっている。

2. 詩人と出版

ディキンスンの詩を階級を背景に考察してみたところで、次いで市場経済へと話を広げてみたい。Michael Gilmoreは、アメリカのロマン派と市場との関係性について論じた*American Romanticism and the Marketplace*で、アメリカ合衆国の1830-60年代を農本社会から市場社会へと突入した経済革命の時代と捉え、アメリカロマン派の文学形式や主題の形成に多大な影響を与えた時期としている。1815年以降、陸地の輸送手段や運河・鉄道の発達によって輸送コストが大幅に削減され、国家規模で市場が形成されてゆくに連れて、商人や市場、製造工場が増大・拡大し、それまで家庭内で行われていた作業が、事業主に先導された作業場や工場での一括生産へと変容していったということだ。文学市場も例外ではなく、生産から流通まで出版工程も産業化し、作者も「文学市場向け商品の生産者」となり、交換経済の法則で著者と読者との関係も金銭取引へと化していったという。1850年までに90％以上の白人が識字能力を備え、読者の下地が整ったものの、アメリカン・ルネッサンスの偉人たちは文学を「商品」へと貶めることに抗い、市場を支配する読者の嗜好に憤りを感じながら、文章を難解にし、社会が引き起こした疎外感を批判して彼らなりに市場経済に適応していったとまとめている（1-17）。ディキンスンの立場でこの時代をまとめるならば、社会を均質化する民主主義や私利私欲が基盤にある資本主義に、過去の共和主義的な美徳が追いやられる時代になっていったとなるだろう。

文学市場と階級との関係に絞って見てみた場合、William Rowlandの指摘が有用だ。彼によると、18世紀末以降に中産階級が自己定義を進める過程で、ロマン派作家たちは自分たちを“genius”と定義し（173）、読者の嗜好（“taste”）を優先するよりは、文学の標準を保つことを志向したため、“low culture”と“high culture”の溝が広がったという（181-9）。[(6)] ディキンスンと文学市場との関係で考えれば、彼女の場合は特定の私的集団（家族、友人、知り合い）に宛てた手紙に詩を添える「私的流通」とも言える「出版」を体現していたわけだが、彼女も文学市場での流通に自ら一歩踏み出したことがあった。そのきっかけを作ったのが、Thomas W. Higginsonが*Atlantic Monthly*に寄稿した“Letter to a Young Contributor”（1862年4月号）である。ディキンスンがこの記事に応じる形でヒギンスンに手紙を出し、その後二人の往復書簡を導くこととなった記念すべき文章だが、その中で、ヒギンスンが読者の“taste”と作家の“Genius”に触れた箇所があるので一読しておきたい。

> Remember how many great writers have created the taste by which they were enjoyed, and do not be in a hurry. Toughen yourself a little, and perform something better. Inscribe above your desk the words of Rivarol, “Genius is only great patience.” It takes less time to build an avenue of shingle palaces than to hide away unseen, block by block, the vast foundation-stones of an observatory. Most by-gone literary fames have been very short-lived in America, because they have lasted no longer than they deserved.（407、下線筆者）

ヒギンスンはこれから*Atlantic Monthly*に投稿する若者たちに向けて、それまでいかに多くの作家たちが作品を書いて市場に受け入れられてきたのかを指摘した上で、先を急いだ作家たちは市場から消えてしまったから、しっかりと文章を練った上で市場に立ち向かうことが重要だと説いている。

ヒギンスンはディキンスンの手紙に同封されていた詩に市場価値を認めなかったが、このことは、彼女の詩が市場の“taste”に合致していなかったことを物語っているだろう。また彼女の生前、匿名で雑誌に掲載された10篇の詩が勝手な編集で句読点や行分け、或いは単語そのものに手を加えられたことも、彼女の詩と市場の“taste”との溝を端的に示している。そんな不如意な編集についてヒギンスンに語った書簡の中で、“I will be patient – constant”(L316:1866)と打ち明けていることは、ヒギンスンの“Genius is only great patience”を念頭においてのものかもしれない。いずれにせよ、ディキンスンは市場の“taste”を優先させることはなかったので、自らの基準を設定していたことは事実だ。そこで、出版の基準についての考えを窺い知ることのできる詩を見てみたい。

Publication – is the Auction
Of the Mind of Man –
Poverty – be justifying
For so foul a thing

Possibly – but We – would rather
From Our Garret go
White – Unto the White Creator –
Than invest – Our Snow –

Thought belong to Him who gave it –
Then – to Him Who bear
It's Corporeal illustration – sell
The Royal Air –

In the Parcel – Be the Merchant
Of the Heavenly Grace –
But reduce no Human Spirit
To Disgrace of Price –　　(Fr788)

ディキンスンの全詩の中で「出版」という意味で“publication”や“publish”が用いられている唯一のこの詩は、南北戦争を引き起こした大義の一つ、奴隷制度に付随する“Auction”という単語を使うことで、作品が「物」として売りに出されること、すなわち“taste”に即した「商品」を作って心を売り渡す状況を定義づける一文で始まる。(7) 続いて断言されるのは、「商品」を売りに出すことが極めて不潔な所作であって、「貧困」だけがその理由に適うということだ。この第一連だけでも明らかだが、この詩は経済に関連する単語――“Publication”, “Auction”, “Poverty”, “invest”, “sell”, “Parcel”, “Merchant”, “Price”――と精神的要素の強い単語――“Mind”, “Garret”, “White Creator”, “Snow”, “Thought”, “Royal air”, “Heavenly Grace”, “Human Spirit”, “Disgrace”――とがせめぎ合う構造を成している。第二連に見られるように、“Mind”をオークションにかける、つまり「雪」に象徴される高潔さ・純潔さを「投資」=「出版」するよりは、思索・詩作に励む「屋根裏部屋」から純潔さを保ったまま高潔な「創造主」のもとへと旅立つ=出版しないまま死を迎えることこそが、この詩の語り手の出版基準だということだ。

作品に吹き込まれる“Thought”はそもそもが「創造主」のもので、それに実体を与える作者に譲り受けられるものだから、気高い調べ(“Air”)を売りに出すこと、天から与えられた恩寵を売りさばく者になること、そして人間の精神を「価格」という不名誉に帰すことはしてはならないのだというのが後半の二連である。(8) ただ、“Thought belong to Him who gave it – / Then – to Him Who bear / It's Corporeal illustration”は出版市場という文脈に限定して考えたとき、Robert Smithが指摘するように一つ目の“Him”を作者、二つ目の“Him”を読者と、創造主/作者からずら

した意味を読み取ることも可能だ。この場合、読者が「商品」に記された作者の“Thought”を手元に所有することになるので、作者自身が自分の身体を売り出すも同然となってしまう（115）。出版が売春ということになれば、James Guthrieが言うように、作者が“property”として屋根裏から引き出され、オークションにかけられることにもつながるだろう（140）。

自ら進んで出版するには至らなかったディキンスンは“Poverty”を心配する必要のない上流階級の生活を送り、アメリカ女性詩人初の職業作家となったリディア・シガニーのようにペンで生活費を稼ぐ必要はなかった。ディキンスンの父親Edwardは地元の有力者でアマスト大学の会計係を40年近く務めたことをはじめ、マサチューセッツ州議会議員、州知事諮問委員、連邦議会議員など政治の分野でも活躍した名士であり、経済的にも財を成したという（Erkkila 133-4）。しかし、そんなディキンスン家も“Poverty”と無縁ではない時期があった。アマスト大学の設立（1821）にも大きく貢献したEdwardの父でディキンスンの祖父Samuel Fowler Dickinsonは、大学の誘致や設立の過程で私財を投げ打った末に破産、1840年、ディキンスンが10歳のときにディキンスン邸はDavid Muckという帽子製造業者の手に渡ってしまう。それから15年後にようやくEdwardがディキンスン邸を買い戻したが、ディキンスン家も“Poverty”の憂き目を見たという事実は、その後も消しがたく残っただろう。[9] なぜならばヒギンスンに送った書簡の中において、ディキンスンが出版と貧困とを結び付けている箇所があるからだ。

> Two Editors of Journals came to my Father's House, this winter – and asked me for my Mind – and when I asked them “Why,” they said I was penurious – and they, would use it for the World –
>
> I could not weigh myself – Myself –
>
> （L261、下線筆者）

ここでも先の詩で見たように出版と精神性を示す“Mind”とが用いられ、それに経済に関連する用語、「貧窮した」（“penurious”）が結び付けられていることに注意したい。“penurious”は実際的な金銭的貧窮を指し示す可能はあるものの、この手紙が書かれた1862年はディキンスン邸が買い戻されてから7年経過し、既に貧窮から脱している時期なので、市場における不出世に言及した可能性が高いと思われるが、たとえ比喩的であるにしても、“Publication – is the Auction”で見た“Poverty”と結びつく単語であることは否定できない。とすれば、ディキンスンも出版することが金銭に直結する市場経済の一部に組み込まれることを意味すると十二分に承知していたはずである。そして貧する心配のなくなった時期に、あえて市場の“taste”にあわせた作品を書いて金銭を得る必要はなかったということにならないだろうか。裏を返せば、詩の内容通り“Poverty”に身を置いていたら出版に乗り出すこともやぶさかではなく、市場の“taste”を最大限考慮していた可能性もあるということだ。しかし、実際には既に経済的基盤の整っていたディキンスンにとってその必要性はなかったと考えられる。では、出版の必要性に迫られないディキンスンの立場はどうなるのだろうか。最後に再びヒギンスンへの書簡を見ておきたい。

> I smile when you suggest that I delay “to publish” – that being foreign to my thought, as Firmament to Fin –
>
> If fame belonged to me, I could not escape

her – if she did not, the longest day would pass me on the chase – and the approbation of my Dog, would forsake me – then – My Barefoot-Rank is better –（L265）

ディキンスンは自身の詩についてヒギンスンから“spasmodic”,“uncontrolled”といった批評を受け、出版は見合わせた方がよいという裁断を下されたことに対し、“Barefoot-Rank”でいることが望ましいと書き記している。市場で「裸足」であることは、名前も知らない読者から批判されることもなければ、その読者を慮る必要もない無名状態を意味していよう。しかし、ここでディキンスンが名声についても言及しているは、自分の詩に少なからず自信を持ち合わせていたことを示していないだろうか。市場で通用する“Rank”よりは“Barefoot-Rank”を選び、「私たちの雪を投資する」よりは自尊心を持って“blank page”（Petrino 48）を紡ぐことをディキンスンは選んだのだという結論を導くことが可能だろう。

おわりに

ディキンスンが属していた階級と当時の経済状況、そして合衆国に浸透しつつあった市場経済を背景にして彼女の作品を読んでみることで、ディキンスンの詩作の背景に迫ってみたが、ランプと出版に関する詩双方において、奇しくも精神と身体というキーワードが共通項として浮かび上がってきた。“The Lamp burns sure – within – ”においては詩人の精神と奴隷の身体、“Publication – is the Auction”においては詩人の精神と詩人・読者の身体である。双方で位相は異なるものの、二つの詩において、社会・歴史の中で交差する人と人とが描き出されているとまとめることはできるだろう。

ディキンスンの詩作品全体を通して見てみると、一見、神や人、または自然と人との関係、あるいは一人称の「私」の自己との対峙などを描いた詩が多く、人と人との関係を描いた詩は少数である。しかし、本論を通してみてきたように、社会、経済、歴史を背景に詩を読み直す作業によって、字義上からは容易に測れない、詩の中に埋もれている人と人との関係性や当時の執筆状態・環境が浮かび上がってくる可能性があり、ディキンスンの詩作品に対するより包括的な理解が深まることだろう。

註

(1) ディキンスンの詩の引用はFranklin版に倣い、Frの記号を付けた通し番号を記す。

(2) *Atlantic Monthly*と同様、ディキンスン家の購読雑誌だった*Harper's New Monthly Magazine*の1854年5月号にも“serf”と“slave”を同義で用いている記事“The Russians at Home”が掲載されている。またJonathan Morseは、カール・マルクスが*New-York Daily Tribune*に寄せたロシアの農奴解放の行方に関する解説記事（1859年1月）を始めとして、南北戦争前夜の国内事情を丹念に追って“serf”を読み解いている。

(3) ディキンスンの書簡の引用はJohnsonに倣い、Lの記号を付けた通し番号を記す。

(4) Johnsonは書簡集の補遺に“A Note on the Domestic Help”を載せている（959-60）。Murrayも“Miss Margaret's Emily Dickinson”でディキンスン家に関係した雇い人たちの名前を列挙し、アイルランド系15人、イギリス系2人、アフリカ系1人を明示、移民以外の白人労働者も総勢10人の名前を挙げているのに加え（704-5）、“Architecture of the Unseen”ではMargaret Maher以外の召使たちに焦点をあてている。

(5) ウェブスターの辞書（ディキンスンが用いたのは1844年版）にはphosphorの意味として「明

けの明星」のほかに可燃物質としての化学的定義を載せている。詩の中では勢いが凄まじいことが“phosphoric”で表現されているようだ。“*Phosphorus,* in chemistry, a combustible substance, hitherto undecomposed. It is of a yellowish color and semi-transparent, resembling fine wax. It burns in common air with great rapidity; and in oxygen gas, with the great vehemence. Even at the common temperature, it combines with oxygen, undergoing a slow combustion and emitting a luminous vapor. It is originally obtained from *urine*; but it is now manufactured from bones, which consist of phosphate of *lime*.”

(6) “genius”の定義を *Oxford English Dictionary* で確認すると、Rowland の指摘通り、「天才」の意味は 18 世紀から使われ始め、「特徴、特質 」(“Of person: Characteristic disposition; inclination; bent, turn or temper of mind. *Obs.*”）の用例は 1804 年が最後になっている。

(7) “Auction”という単語が使われているのもこの詩だけである。“Auctioneer”も一度のみの使用だが、こちらは正しくオークションの模様を描く際に用いられている：“The Auctioneer of Parting / His “Going, going, gone” / Shouts even from the Crucifix, / And brings his Hammer down –”（Fr1646)。

(8) Raymond Wilson は“White Creator”, “Royal Air”, “Human Spirit”に“God”, “Jesus”（“Air”と同音の“heir”から）, “Holy Spirit”を読み取り、“sell/The Royal Air –”にユダによって売り渡されたキリストを読み込んでいる(273)。

(9) Mitchell は“Emily Dickinson and Class”で、倒産物件が裁判所に差し押さえられてオークションにかけられていた慣習と“Publication – is the Auction”を関連付けている（199-202)。

引用文献

Allen, RC. *Solitary Prowess: The Transcendentalist Poetry of Emily Dickinson*. San Francisco: Saru P, 2005.

Bingham, Millicent Todd. *Emily Dickinson's Home: Letters of Edward Dickinson and His Family*. New York: Harper & Brothers, 1955.

Dickinson, Emily. *The Poems of Emily Dickinson: Variorum Edition*. Ed. R. W. Franklin. 3 vols. Cambridge, MA: Harvard UP, 1998.

---. *The Letters of Emily Dickinson*. Eds. Thomas H. Johnson & Theodore Ward. Cambridge, MA: Harvard UP, 1958.

“Emancipation in Russia” *Atlantic Monthly* 8.45（1861）: 39-57.

Erkkila, Betsy. “Dickinson and the Art of Politics.” *A Historical Guide to Emily Dickinson*. Ed. Vivian Pollak. Oxford: Oxford UP, 2004. 133-74.

Farr, Judith. *The Gardens of Emily Dickinson*. Cambridge, MA: Harvard UP, 2004.

Gilmore, Michael. *American Romanticism and the Marketplace*. Chicago: U of Chicago P, 1985.

Guthrie, James R. *Emily Dickinson's Vision: Illness and Identity in Her Poetry*. Gainesville: UP of Florida, 1988.

Higginson, Thomas Wentworth. “Letter to a Young Contributor.” *Atlantic Monthly* 9.54（1862）: 401-11.

Mitchell, Domhnall. “Emily Dickinson and Class.” *The Cambridge Companion to Emily Dickinson*. Ed. Wendy Martin. Cambridge: Cambridge UP, 2002.

---. *Emily Dickinson: Monarch of Perception*. Amherst: U of Massachusetts P, 2000.

Morse, Jonathan. “Conduct Book and Serf: Emily Dickinson Writes a Word.” *Emily Dickinson Journal* 16.2（2007）: 53-72.

Murray, Aife. “Architecture of the Unseen.” *A Companion to Emily Dickinson*. Eds. Martha Nell Smith & Mary Loeffelholz. Malden, MA: Blackwell, 2008. 11-36.

---. “Miss Margaret's Emily Dickinson.” *Signs: Journal of Women in Culture and Society* 24.3（1999）: 697-732.

Petrino, Elizabeth A. *Emily Dickinson and Her Contemporaries: Women's Verse in America, 1820-1885*. Hanover: UP of New England, 1998.

Rowland, William G, Jr. *Literature and the Marketplace: Romantic Writers and Their Audiences in Great Britain and the United States*. Lincoln: U of Nebraska P, 1996.

Schlereth, Thomas J. “Conduits and Conduct: Home Utilities in Victorian America, 1876-1915.” *American Home Life, 1880-1930: A Social History of Spaces and Services*. Eds. Jessica H. Foy & Thosas J. Schlereth. Knoxville: U of Tennessee P, 1992. 225-41.

“The Russians at Home.” *Harper's New Monthly Magazine* 8.48（1854）: 801-6.

Smith, Robert McClure. *The Seduction of Emily Dickinson*. Tuscaloosa: U of Alabama P, 1996.

Webster, Noah. *American Dictionary of the English Language*. 1828. San Francisco: Foundation for American Christian Education, 2000.

Wilson, Raymond Jackson. *Figures of Speech: American Writers and the Literary Market Place, From Benjamin Franklin to Emily Dickinson*. Baltimore: Johns Hopkins UP, 1989.

デイヴィッド・R・ローディガー『アメリカにおける白人意識の構築――労働者階級の形成と人種』小原豊志、竹中興慈、井川眞砂、落合明子訳、明石書店、2007.

詩人の経済指数

A Poet's Economic Index
- Dickinson and Lamp, Publishing, Body -

YOSHIDA Kaname

【abstract】

The purpose of this paper is to examine Emily Dickinson's poems and letters concerning the oil lamp and publishing from a social, economic, and historical standpoint. The first poem I explore is "The Lamp burns sure – within – ," in which a poet symbolized by a lamp thinks on his/her own writing while domestic servants refill the lamp so the poet can write. This means that the poet can create through the servants' help. The second poem I investigate is "Publication – is the Auction," one of the interpretations of which is that writing poems for the literary marketplace is selling his/her own physical body as a commodity, so that the poet is unwilling to publish except when in abject poverty. Reading these two poems with Dickinson's letters and social or historical materials leads to the conclusion that her poems are outputs of her literary life and economic surroundings.

【key words】

Emily Dickinson, Lamp, Publishing, Body